『雲隠六帖』伝本二系統各本文の特色（二）

――先行表現の摂取――

小川陽子

はじめに

『雲隠六帖』の現存諸本が流布本系（版本およびその書写本を中心とした系統）と別本系[1]（写本のみで伝わる系統）の二つに大別されることは、夙に知られている。しかし、その二系統がいかなる関係にあるかという問題について先学の見解が分かれており[2]、稿者はこれまで以下のように検討を行なってきた。

①『雲隠六帖』伝本研究―別本系統諸本の相互関係について―（『国文学攷』第183号　平16・9）

②『雲隠六帖』伝本二系統の関わりについて―識語を視点として―（『国語と国文学』第82巻7号　平17・7）

③『雲隠六帖』伝本二系統各本文の特色（一）―基本的な性格の差異―（『古代中世国文学』第21号　平17・5）

まず①別本系諸本の相互関係を検討した上で、②二系統が共通祖本からそれぞれ独自に発展したと考えるのが妥当であることを論じた。そのように解した場合、各系統がどう本文を改変しいかなる方向に物語を発展させたか、二系統がどういう差異を持つに至ったか、という点が問題となる。その一端として誤脱や敬語表現等の基本的な性格の差異を論じたのが③であり、本稿はこれに続くものである。

本稿では、『源氏物語』本文や和歌、漢詩といった先行表現を二系統がいかに摂取しているか、という角度から検討を行ない、主に流布本の特色について考察を進めたい。

一　『源氏物語』引用①

雲隠巻中盤、失踪した光源氏の行方を案じる冷泉院は、夢を見る。それは、仏道修行に励む光源氏と、その傍らに控える美しい女性の姿であった。続いて、この女性に対する冷泉院の解釈が語られる。

【例1】[3]

㊀流 冷泉院心これや、わすれかたくおもひしつみ給ふたいのうへならん。《こちたかりし御ぐし》のいまもめてたくみえ給ふ。》げにきやうさくなる人かな。（雲隠五オ・4）

㊁別 これやこの、わすれかたくしたまふたみのうへならん。けにいときやうさくなる人かな。（雲隠六オ・8）

対の上、すなわち紫の上と認めるのであるが、ここで注意したいのは、流布本系のみが有する《　》内の描写である（以下、二系統の主な相違部分を《　》で示す）。「こちた」き御髪とは、『源氏』において、紫の上の美質のひとつとして繰り返し語られたものであった。

紫の上は、葡萄染にやあらむ、色濃き小袿、薄蘇芳の細長に御髪のたまれるほど、こちたくゆるるかに、大きさなどよきほどに様体あらまほしく（下略）（若菜下④一九二）[4]

御髪のただうちやられたまへるほど、こちたくけうらにて、つゆばかり乱れたるけしきもなう、つやつやとうつくしげなるさまぞ限りなき。（御法④五〇九）

一例目は六条院の女性たちを花に比した著名な場面、二例目は紫の上が亡くなる直前の様子を描く場面で、どちらも紫の上の美質が語られ、その共通項として〈こちたき〉御髪がある。流布本系は、その美質が亡くなった今なお維持されていることを称えるのである。

しかしここは《　》内がなくとも紫の上を称える文脈となっており、不可欠の表現というわけではない。むしろ〈こちたき〉御髪は紫の上の鍵語であり、これによって美質が強調されるわけであるから、共通祖本の段階でこの描写があったのであれば、それをわざわざ取り除くとは考えにくい。流布本系が『源氏』に基づいて補筆したと解するほうが自然であろう。また次のような例もある。

【例2】

㊀「おはしまさはいかにかひあらまし」とおもひうむじ給ふにも、《御むねのみつとふたがりて、なみたのひまなく流れおはしますを、あやしとたに見たてまつるにぞ、さふらふ人くも袖はひちまさりぬ。》をりふし鳫のなきてすぎければ

（雲雀子二ウ・2）

㊁「おはせましゝかはいかにかひあらまし」なとゝおもひうつし給ふ。おりふしかりなきてわたりければ（雲雀子二ウ・2）

少将の君が亡き父薫を思い起こす場面で、流布本系のみ涙にくれる様が描かれる。この傍線部は「日本古典偽書叢刊」[5]が指摘するように、桐壺更衣を亡くした帝が涙にくれる描写に合致する。[6]

御胸のみつとふたがりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。（略）何ことかあらむとも思したらず、さぶらふ人々の泣きまどひ、上も御涙の隙なく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを。（桐壺①二三）

流布本系の当該箇所は、薫が生きていたら、と憂えているとまさにその折、雁が鳴いていくという場面であり、《　》内の描写は不可欠のものではない。さらに言えば、この《　》部分は少将と従者それぞれの涙を描くものであるが、六帖全体を見渡しても、当該例と後述する【例3】を除き、これほど言葉を費やして悲しみの涙を表現する箇所は見受けられない。

・ふたりなからうちなきてまうす（㊀雲隠二オ・5／㊁二ウ・5「ふたりなから申けれは」）

・今も涙くみ給ふ（㊀雲隠三ウ・7／㊁四オ・7）

・たゝふたりかしらさしあはせてなきになく（㊀雲隠八ウ・9／㊁一二オ・3「たゝ二人なくよりほかの事そなき」）

・いまも涙くまれ給ふ（㊀桜人四ウ・5／㊁四ウ・2「いまもなみたぐみつゝあはれつきせず」）

いずれも「泣く」「涙」をこく簡潔に記してあることがうかがえよう。

そもそも一読して明らかなように、この物語の表現は、心理にせよ状況にせよ、細部にわたって言葉を費やし情感豊かに描き出す、という性質のものではない。確かに人々の悟りへの過程は仏教語が散りばめられ長々と語られる。しかし一方で物語の展開を推し進める種々のエピソードは、いずれもその因果関係や途中経過、人々の心情などが略され、とにかく次から次へと話題が積み重ねられるのである。出来事の筋さえ追っていけば十分だと言わんばかりであり、『源氏』の文章に近づけることなど端から意図してはいなかったように見受けられる。おそらくそれはこの物語の本質に関わるもので、「梗概書」[7]的な性質が端的に表れたものと解すべきであろう。

そしてそのような物語の基本的性質が表出した先の「泣く」「涙」の諸例と比較すると、【例2】の描写は明らかに異質であり、【例1】と同様、流布本系が『源氏』によって言葉を補ったものと解釈すべきではないだろうか。すなわち流布本系の特色として、『源氏』本文を独自に引用し、描写を増補する傾向が看取されるのである。

二　『源氏物語』引用②
――法の師巻における死者をめぐって――

このような流布本系の傾向を念頭に置きつつ読み進めると、法の師巻の一場面が目にとまる。まず別本系の本文を確認する。

【例3】

㉙これ（＝三ノ宮）は、うちのおとゝ（＝薫）の小さいしやうのはらのひめきみかたちよききこえありて、しのびく御心さしありしかは、おとゝも「あらまほしきことにこそ」とてへいしなといたさせ給て、ほゐのことくありしを、かくおもはすに、（三ノ宮八）やまうなとゝいふ事さへかくなり給たる事とてこがれたまふほとに、五日はかりやおはしけん、おなしみちになりたまふ。《おとゝ、又なげき給ふ事かきりなし。》さらぬたにこの世は夢とのみおもひ給を、かゝる事をさへ見給へは、かた時もかくておはせんともおもひ給はず。（法の師二ウ・10）

匂宮の皇子三の宮が亡くなった直後の場面。宮は薫の姫君に思いをかけており、薫もそれを喜んでいた最中の死であった。五日後、後を追うように姫君も亡くなり、薫が悲嘆にくれる様が描かれる。

これに対し流布本系は、描写・物語展開ともに大きく異なる。

㉚これは内のおとゝの（脱落アリ）[8]しのひくの御こゝろさしなりしかは、おとゝも「あらまほしきことにこそおはしけめ」なとほいの事おほしけるを、かくおもはすになやみわたり給ふといふほともなく成給ひし事とて、こかれかなしみ給ふ。Ⅰ《藤つほ（＝宇治中ノ君）「おなしみちに」となげき給ひしが》五日はかりやおはしけん、うせ給ふ。Ⅱ《みかと（＝匂宮）はあきれさせ給ひて、なかく御涙をだにおち給はず、すきにしむかしの御事ともおほしいつるに、なに事につけても、御こゝろにくう、あたくしかりつる御こゝろとしるく、まめくしく

うらみたてまつりもし給はず、よきほどに聞えなし、涙をもらしても、いとゝつゝましげにまきらはし、つらきをおもひしるさまにて、らうたげにをかしかりし。花鳥にもよそふべきたとへしなく、「いかにしてかは、ありしながらの御すがたを見たてまつるべき。人の国にはたまかへすといふ香のありもそする。そのありがをたづねてがへりけるためしもなき事か」とあけくれなけかせ給ふ。宮たちを御らんしては「忍ぶの草の」とひとりごち給ひ、あえなくみなしてし御かなしさは世をかへてもわすれかたきを、御おこなひし給ふ御こゝろのうちしきり給ふも、あはれにかたしけなしと聞奉る。》内のおとゝは、さらぬたに夢と思ひしり給ふを、はかなきことをさへみたまへは、しばしもかくてためらふへしともおもほし給はす（法の師二オ・10）

文意をとりづらい部分もあるが、別本系に対し大きく二点、Ⅰ三の宮に続いて亡くなったのを宇治中の君（三の宮の母）とすること、Ⅱ匂宮が悲嘆にくれる様子を描く点で相違がある。すなわち、三の宮に続く死者と、残されて嘆く者とが、二系統で異なるのである。

ここで注目したいのが、Ⅱ傍線部イロである。実は、それぞれ帚木・桐壺両巻にほぼそのままの表現が存するのである。まずイは、

まめまめしく恨みたるさまも見えず、涙を漏らし落としても、いと恥づかしくつつましげに紛らはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむはわりなく苦しきものと思ひたりしかば、心やすくて、またとだえおきはべりしほどに、跡もなくこそかき消ちて失せにしか。（帚木②八一）

のように、撫子の女すなわち夕顔の様子を語る頭中将の言葉が、また口については、「日本古典偽書叢刊」に指摘するとおり、

かの贈物御覧ぜさす。亡き人の住み処尋ね出でたりげんじるじの鈬ならましかばと思ほすもいとかひなし。

たづねゆくまぼろしもがなつてにても魂のありかをそこと知るべく

絵に描げる楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければいとにほひすくなし。太液芙蓉、未央柳も、げにかよひたりし容貌を、唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方そなき。（桐壺①三五）

のように、桐壺帝によって思い出された更衣の様子が、それぞれ当該本文に摂取されたことが明らかであろう。加えて口に続く波線部、匂宮の言葉には、玄宗皇帝が楊貴妃を求めた故事が引かれるが、桐壺巻においても破線部のように同じ故事が引用されている。

これを先の例と照らし合わせると、【例3】では中の君を、【例2】では薫を、それぞれ亡くした悲嘆にくれており、場面の共通性が認められる。そして、それぞれが引用する『源氏』の場面においても、姿を消した撫子の女を思う頭中将、亡き桐壺更衣を思う帝の姿が描かれるのである。つまり、二つの例はともに、故人を偲ぶ描写を『源氏』によって取り込んだものと言える。となれば、【例2】と同様に、

【例3】も流布本系の補筆と見るのが妥当ではないだろうか。

これに続く法の師巻後半は、二系統ともに薫と浮舟の出家を描く。つまりこの場面は、別本系のように、姫君を亡くした薫が悲しんで出家を思い立つ、と続くのが本来であったと考えられるのである。流布本系は、死者を薫の姫君から中の君へと変更した上で、悲嘆にくれる匂宮の姿を補ったものと解せよう。

このように考えると、物語全体における登場人物の死と残された者の出家・仏道への傾斜のあり方ともつながってくる。今簡略に、上段に死者、下段に出家者ならびに仏道願望者を記す。

[雲　隠] 紫の上　→　光源氏の出家・悟り
[巣　守] 光源氏　→　冷泉院の内省・受戒
[桜　人] 紫の上　→　匂宮への仏道勧奨
[法の師] 薫姫君　→　薫の出家（別本系）
　　中の君　→　薫の出家（流布本系）
[雲雀子]　薫　→　少将の君（＝薫子息）の出家願望

人の死が、その親・子・配偶者といった縁者を仏道へと誘う様が見てとれる。流布本系の場合、薫と中の君とは旧知の間柄であるし、薫の出家願望も『源氏』以来のものであるため、物語展開としてやや唐突であるものの無理があるわけではない。がしかし、他の巻と比して異質であるとの感は否めない。薫の姫君の死を描く別本系のあり方が本来であり流布本系をその改作ととらえるならば、祖形『雲隠六帖』においては一貫して、人の死が縁者に仏道を勧奨する役割を果たすものとして描かれていたのだと首肯されるのである。

先に挙げた諸例に戻れば、『源氏』本文から表現を摂取し、物語に奥行きを持たせようとする流布本系のあり方は、より『源氏』を志向するものと言える。確かにそれは改作であり、物語本来の方向性とは異なるものであるが、『源氏』ならびに祖形『雲隠六帖』に対するひとつの読みの結果であり、発展の姿として留意すべきであろう。

三　和歌的修辞および引歌表現

これまで流布本系が『源氏』を摂取する様を確認してきたが、注意しておきたいのは、これが対『源氏』に限定されたものでないという点である。以下考察するように、流布本系は、和歌や漢詩などについても、先行表現を取り込んで本文を形成したことが認められるのである。まず和歌や歌ことばについて見ると、次のようにある。

【例4】
㊀世には物おもひ草の露しげくをきまさり給へるかとおもほえ侍へる人もありなまし。（雲隠五オ・10）
㊁世中には物おもひのくさはひになり給へとも（雲隠六ウ・6）

やや文脈が異なるものの物思いについて述べる点では一致し、流布本系のみ「物おもひ草の露しげくを」く、と和歌的修辞によっていることがわかる。

また、冷泉院が失踪した光源氏を夢に見る場面。

【例5】

㊀「げにきやうさくなる人かな」とおもひ給ふほどにうちおどろき給ふ。《夢としりせばと》名残いとかなしくおほし給ひて

（雲隠五オ・6）

㊁「けにいときやうさくなる人かな」とおもひたまふほとにうちおとろきたまひて、なこりもいとこひしくて（雲隠六オ・10）

流布本系のみ『古今集』巻第一二・恋歌二・五五二番、

思ひつつぬればや人の見えつらむ夢としりせばさめざらましを

を引くことが確認される（版本付載の注釈書に指摘あり）。この直前には、光源氏に思いを馳せ「御こゝろのいとまなく」過ごす冷泉院の姿がある。そのまま眠りについて光源氏の夢を見、目覚めて「名残いとかなしくおぼ」すのであり、まさにそれは「思ひつつ～」詠を体現したものといえる。ここでの冷泉院の心情を集約したのが「夢としりせば」の引歌表現なのである。さらに次の例では、

【例6】

㊀御世をもいとひはなれまほしうおほしけれとも、女一の宮もいまた御うしろみなともおはしまさす、みやす所の御はらのわか君・女二の宮なとの、らうたけにおはしけるを、あはれと見たてまつり給ふに、おほしたつことのすちはかたけれは、《「あなうの世や」とおほしつゝけて》

ものことの見すてかたきにほたされて我そすもりになりぬへきかな（巣守一オ・5）

㊁「世をやそむかまし」なとゝおほしめしけれとも、女一の宮もいまた御うしろみなともなく、みやす所の御はらの姫宮・わかみやなと、らうたけにておはするを見給ても、おほしめしたつことのすちいとかたけなれは、

ものことのみすてかたきにほたされてわれそすもりになりぬへらなる（巣守一オ・8）

とあり、流布本のみ『古今集』巻第一八・雑歌下・九三六番、

しかりとてそむかれなくに事しあればまづなげかれぬあなう世中

を引く。出家願望を抱くも皇子たちの姿を見るにつけその難しさを感じる場面であり、冷泉院の心情はまさに「しかりとて～」詠に重なり合うものと言えよう。【例5・6】ともに、引歌表現によって冷泉院の心情がさらに奥行きを与えられたものと解せる。

このように流布本系のみが持つ引歌表現は、二系統で前後の文脈がほぼ共通する箇所に五例、さらに場面展開や文脈が大きく異なる箇所にも三例、確認できる。別本系のみが引歌を持つ箇所が一例のみであるのに比べ、明らかに流布本系に引歌が多用されていると言える。そして右に引用した二例がいずれも、その場面の登場人物の心情を表現するのに適した和歌を用いていることから見て、もともと祖形本文にこれらの引歌があったとすれば、それを別本系の改作にあたって取り除いたとは考えにくい。もちろん本文を簡略化するために省いた可能性もあるが、五例すべて前後の文章は変更せず引歌の箇所のみを選んで省略したというのもできすぎた話であろう。

たとえば桜を愛でる匂宮の描写においては、

【例7】

㊫けに、なへての花の色にもにす、香もなつかしく、めつらしきさまに御覧して、「ちりなんのちの」とのたまひて

なきかけのかたみとおもふ花なれはかつみるからにあはれとをしる（桜人七ウ・3）

㊥けに、なべての花の色にもにず、めつらしきさまに見えけれは、「ちりなんのちの」なとすんし給て

露の身のきゆるかたみに花をえて見るたひことにあはれ世の中（桜人八オ・5）

のように引歌表現を共有する。ここでの〈心情描写（花を愛でる）＋引歌表現＋和歌〉という叙述のあり方は、【例6】とまったく同じであり、仮に【例6】において「あな憂の世やと思し続けて」という問題の箇所を取り除いたのであれば、ここもまた削除の対象となるはずである。それがそのまま残っていることを考え合わせれば、【例7】が共通祖形から引き継がれたものであるのに対し、【例6】は流布本系が派生する際に付加されたものと見るべきであろう。

以上から、和歌への関心の高さとその本文への取り込みが、流布本系の特徴のひとつと認められよう。

四　漢籍の引用

次に、漢籍に由来する表現を確認しておきたい。

【例8】

㊫「かくおもひたち給ひてより、すくる月日のいとながう《おさなきとしの》こゝちぞし給ひしを」なと申させ給ふに

（雲隠三オ・8）

㊥「かくおもひたちしよりは、すくる月日もいとなかき心ちそせし」なとゝきこえたまへは（雲隠三ウ・2）

光源氏が出家願望を抱いて以来の心情を語る場面であるが、「抄」が指摘するように、年月の長さの描写に流布本系では「日長如小年」（唐庚「醉眠」）という漢詩の一句が取り込まれている。

この他にも流布本には漢籍引用が見えるが、いずれも前後が二系統で大きく異なる。まず冷泉院が悟りについて思いをめぐらす場面。

【例9】

㊫「げにや、人の身にほとけのたねとてあなるもの。これを見あらはさぬかきりは、こゝろのまとひに世もはつかし。《いつまてあさましうはすこしはつへき」など、とざまかうざまにおほしめくらせと、なをかひなくむすほゝれて、そむるにしたがふ糸の色までなぞらへられ給ふ。》（巣守一ウ・4）

㊥「けにや、人の身に三身とて有なるか、それをみあらはさぬかきりは、心もぬるくよもはずかしき《といふなる物を」とあさましくおほしめしつゝけ、「この世をいとひはなれてしかな」と御心ひとつにのみあかしくらし給て》（巣守一ウ・8）

「仏の種」（㊥「三身」）を自身で見つけぬ限り恥ずかしい、という

部分までは両系統一致するものの、以下《 》内は表現も文脈も異なる。その相違箇所に流布本系は「染むるに従ふ糸の色」という、『蒙求』の「墨子悲糸」による表現を用いるのである（「抄」に指摘あり）。

次に法の師巻で亡き中の君を思い匂宮が悲嘆する場面。

【例10】

㊫「いかにしてかは、ありしながらの御すがたを見たてまつるへき。人の国にはたまかへすといふ香のありもそする。そのありかをたつねてかへりけるためしもなき事か」とあけくれなけかせ給ふ（法の師三オ・3）

何とかしてもう一度その姿を見たいと願う匂宮の心情が、「魂かへすといふ香」および「そのありかを訪ねて帰りけるためし」という二つの故事を取り入れつつ描かれる。これは、前者が亡き李夫人を求める武帝と反魂香、後者が亡き楊貴妃を求める玄宗皇帝と道士の故事をそれぞれ指していよう（いずれも「抄」に指摘あり）。ところが当該場面は、【例3】で『源氏』本文の摂取という観点から論じたように、流布本系の増補と考えられるのである。このため、ここでの漢籍引用二例もまた流布本系の増補ということになろう。

さらに八橋巻における匂宮と上人の対話場面。

【例11】

㊫佛のしめし給へるくさくのをしへは、しなかはりてきこえ給へらるゝも、みなもとはこれひとつとこそつたへてはおはしませ。人のもとめおもふところ、こゝろざし、そのおもてのことくにて、ひとしうもおはせぬにぞ、さまくはうべんのをしへはひらき給へれと、つとめていたるみちは、たかき・いやしき、たゝ心法のもとを見つけまいらするよりほかはましまさず。（八橋一ウ・3）

悟りに至るにはどの道に頼るべきかと尋ねた匂宮に対し、上人は「源はこれ一つ」と答える。人の思いがそれぞれ異なるためさまざま教えが用意されているに過ぎず、「つとめて至る道」すなわち極楽への道は一つだと説くのであるが、その言葉には『春秋左氏伝』襄公三十一年の一節「人心之不一同也、如二其面一焉」が取り入れられている（「抄」に指摘あり）。これに対し別本系は、同じように道は一つと説くものの、それは「いつれのしうもみちは只ひとつにて候」（㊥八橋一オ・10）と、いたって簡潔な表現となっている。

このように漢籍引用が基本的には流布本系に偏っているのに対し、法の師巻末のみ違った様相を見せている。ここでは流布本系が、

【例12】

㊫ 世の中にありやなしやといふまてはなをわすられぬこゝろどをしる

とて、あからさまにたち出給ふやうにて、あともなくかきけちてうせ給ふ。世におはせんには、はかなき中にさすらひて、あきたきもつらき事もありなん、とうとましさのまさりてのかれ給ふになん。いとかしこきおこなひ人のありさまや、とうらやまれてこそ。ほうしはらあまたさふらふにも、ためしにをしへ

まほしうそおほしける。（法の師八オ・6）

と現世を厭い姿を消した薫のあり方を称えて終わるのに対し、別本系は次のようにある。非常に長い描写であるため、一部略して示す。

別 ありなしといふまてはなをあるかたち有無をはなるゝ心とをしれ

とて、つゐにゆくかたなく。れいしうのいけのそこには千秋の月をもてあそび、じゆふくのそのゝほとりには万歳のともをあいし、大ひの光は三こうの露をせうす。大じの月輪は六しやうの露をちらす。（中略）露のいのちはきえやすし、しゆつせきの火のことし。ぶるぎやどにはとゞまりがたし、さんどうの水にわたり、となんくはんし給ふ。まことにありかたき事とそ、よのためしにも申つたへ侍りけるとなん。（法の師八オ・6）

網掛けを施したように最後の薫詠は流布本と多くの語を共有しており、ここまでは二系統が共通基盤に立っていることがわかる。ところが続く描写が大きく異なり、別本系ではＡａからＧｇまで、計七つの対句表現が用いられているのである。現在のところこの典拠は不明であるが、漢詩（日本漢詩も含む）に依拠したものであることはほぼ間違いないと思われる。なお追求すべき問題である。ただし、この長文にわたる引用は、これまで検討してきた流布本の漢籍引用のさりげなさとは相当異なっていることに留意が必要であろう。

このように【例8】以外はいずれも二系統で大きく本文が異なる上に、二系統共通部分には同様の表現が見当たらないこともあって、各場面においてどちらが祖形であるか見きわめることは難しいと言わざるを得ない。【例10】が流布本の後補と考えられるため、あるいは長大な引用を含む【例12】以外は流布本の改変・付加である可能性が高いかと考えられるが、この点についてはなお慎重でありたい。ひとまず、二系統を比較した場合の流布本系の特徴として、漢籍摂取の多さをとらえておきたい。

五　仏典の引用

最後に、流布本系における仏典および仏教説話のあり方を見ていく。まず雲隠巻における光源氏の西山行きの場面。

【例13】

流「我」（＝光源氏）ははや、この世をなんはなるへき。《ふかき山にもいりたちて、たきゝをこり水をはこひてつかへ給ふけるほとけのおこなひ給ふといふためしをつとめ給ひなん、とおもひ給へるには》つかうまつらん人もなにせんに、これよりかへりね」とのたもふ。「いかて、おほくのなかにえらはせ給ふてめ（傳秀調）ししたがへ給へるに、とらのふす野邊わにのよるうらのはてしにも、御もろともにこそ」と、ふたり（＝惟秀・岡部）なからうちなきてまうすにそ、《「ほとけもはじめ、世をのかれて、山しこもり給ふには、五人のおもとひとはしたがひたてまつりけりと聞給へられし」とまで。》「さもこそあらめ。此車はいづくにもすてをけ。すぎやうのはじめ、かちよりぞまうでなめる」とて、（調）

かけはづしており給ふ。（雲隠一ウ・8）

別「われははや、此世をはなるべきためなりしか、二たひ都にかへりみずは、まいりこよ。さなくは、これよりもどりね。ふかき山にも入なん」とのたまふを、「いかてか、おほくの中にえらはせ給てめしくせられまいらせて、いつちへかまかり申べき。たとひとらふす野辺に「わしのみねなりとも、かしこけれとも御もろともにこそ」と、ふたりなから申けれは、「さも侍らは、この車をはいつくにもすてをけ。われはしゆきやうのはしめ、かちよりゆかん」とてをり給。（雲隠二オ・6）

出離の思いを述べる光源氏の言葉、対する惟秀らの言葉に、それぞれ仏典に見える故事が流布本系のみ取り込まれている（いずれも「抄」に指摘あり）。まず光源氏が『法華経』提婆達多品に見える修業時代の釈迦の故事を取り上げて帰還を促すのに対し、惟秀らは、その仏の山籠もりには五人の御許人が付き従っていた、と五比丘の仏教説話を挙げ、付き従うことの正当性を語るのである。

そしてこれに対応するように、破線部、惟秀らの例示にも異同が見える。流布本系で「虎伏す野辺、鰐の寄る浦の果て」と辺境の地を強調するのに対し、別本系では「虎伏す野辺」のような辺境の地であろうと「鷲の嶺」説法の場である霊鷲山であろうと付き従う、と語るのである。流布本系の場合、五比丘の故事と合わせ、いかなる辺境の地であろうと五比丘のように付き従う、という文脈と解せよう。どちらが祖形をとどめているかは判断しがたいが（どちらも改作という可能性もある）、流布本系が仏教説話の引用によって光源氏の姿を釈迦に重ね合わせている点は注意すべきであろう。

あるいは冷泉院の悟りの場面。

【例14】

流蔵人の少将、おなしすみそめにやつしてさふらひける、いとゝかなしう見たてまつれは、《「もゆる火のすみかを出はなれて、衣のうらの玉もとめ得たる事をなん、よろこはしきに、わきて物おもひもなし」との給ふ。》（三ウ・9）

別くら人の少将、おなしくすみそめにやつしはてさふらひけるが、いとはしけにおもひたてまつるを御らんして、《「なにかいとふなにをかなけくかりの世はあるにまかせてあるそありよき」

とうちずんしてそおはしける。》（巣守四ウ・3）

流布本系では冷泉院が出家後の思いを語る言葉に、『法華経』譬喩品に見える「火宅」と、五百弟子品に見える「衣裏珠」とが取り入れられている（「抄」に指摘あり）。これに対し別本系では、同じ箇所が冷泉院の詠歌となっている。両者を比して見れば、流布本系では、『法華経』の言葉を用いることによって、俗世を離れて悟りを得た冷泉院の喜びの心情がより強調されたものと読めよう。

その一方、二系統共通部分においても、

【例15】

流ほとけも、ねはんの雲にかくれ給ふといふことは、たゝ人の

世のさまををしへ給ふなる。（桜人八ウ・1）

㊀しやくそんねはんにいり給ふといふ事も、たゝ世のありさまをしめさんためなり。（桜人八ウ・7）

のように『法華経』如来寿量品に見える釈迦入滅後のことが取り込まれおり、仏教説話の引用がすべて流布本の創出というわけではない。しかし流布本系は、この他にも別本系と大きく異同を持つ箇所で「一味のめぐみくる草木のをのれ〳〵に花さくときのきざしはときをそきみな色をあらはし侍へるがごとく」（八橋一ウ・10）と『法華経』薬草喩品に見える喩えが引かれるように（「抄」に指摘あり）、仏典・仏教説話の引用をひとつの特徴とすることは確かと言えよう。

おわりに

以上、本稿では先行表現の摂取という観点から二系統の相違を検討してきた。その結果として、流布本系は、『源氏物語』をはじめ、和歌・漢詩・仏教説話などを積極的に摂取した本文であることが確認された。もちろんその一部は祖形『雲隠六帖』においてすでになされていた可能性もあるが、明らかに流布本系の付加・補筆と見られる箇所も複数見受けられる。すなわち、流布本系は、その改作にあたって先行表現の摂取に力を注ぎ、それによって登場人物の心情等に奥行きを与えることを目指した本文と見ることができるのである。

これに対し別本系は、前稿で確認したように、説明的叙述の増補に力を入れている。このことは、別本系の本文が、物語の筋をよりわかりやすく展開することに主眼を置いて成立したものであることを意味していよう。

右のように見れば、一部の観点からの検討ではあるが、二系統の物語本文が祖形『雲隠六帖』からそれぞれに派生した際の、基本的な改作のポイントの相違が浮かび上がってくるように思う。このことは、それぞれの系統本文の改作主体や改作の場の問題とも繋がってくるかと思われるが、これまで論じてきた以外の二系統の相違点も含め、なお検討を重ねることとしたい。

〔注〕

（1）二系統はそれぞれ流布本・普通本、別本・異本などさまざま称されてきたが、本稿では版本とその書写本を流布本系統、写本のみで伝わるものを別本系統と呼ぶこととする。

（2）山岸徳平・今井源衛氏「宮内庁書陵部蔵青表紙本源氏物語」『山路の露・雲隠六帖』（昭45・新典社）、吉田幸一氏「「雲かくれ六帖」小考」（『源氏雲隠巻』平2・古典文庫）

（3）本文は、流布本系が上方版無刊記九冊本、別本系が知県立大学附属図書館蔵本による。引用本文の系統を略号（流布本系＝㊀、別本系＝㊁）で引用箇所の頭ないしは末尾に、所在を末尾の（　）内に記す。引用に際しては、私に句読点・傍線等を施し、底本の表記に問題がある場合は当該箇所の右傍に注記を付す。

（4）以下、『源氏』本文は「新編日本古典文学全集」、和歌は『新編国歌大観』による。

（5）今西祐一郎氏校注「日本古典偽書叢刊」第2巻（平16・現代思潮新社）

（6）雲雀子巻「あやしとたに」に対し『源氏』諸本「あやしと」とあるなど、細かい点での異同は存する。後掲【例3】も同様で、現在のところ『雲隠六帖』の引用とまったく同じ本文を持つ『源氏』伝本は管見に入らない。梗概書や注釈書の本文状況をも視野に入れるべきかと思われるが、今後の課題としたい。

（7）本物語を「梗概書」としてとらえる視点は、今西祐一郎氏・河添房江氏により提示されている（座談会「物語の未来へ」『源氏研究』第10号　平17・4）。『源氏』梗概書については、稲賀敬二氏が一条兼良・三条西実隆等による正統派の享受との位相差を指摘された（『源氏物語の研究　成立と伝流〔補訂版〕』「笠間叢書1」昭42初版、昭58補訂版・笠間書院）。そもそも本物語の有力な発生母胎の一つである『源氏』別伝の巻々の名（「八橋」「嵯峨野」「挿し櫛」など）は、『源氏』古注の中でも正統派の『花鳥余情』『弄花抄』などに取り上げられず、『源氏秘義抄』や『光源氏一部歌』といった、異説を伝えるものに記されている。それを受け入れ、かつ新たに創作するという『雲隠六帖』の態度は、まさしく傍流の『源氏』享受に位置するものである。別本系『雲隠六帖』の奥書にはこの物語が「禁中に深く秘」されていたとあるが、このように六帖が秘蔵されたという同類の伝来事情が増補本系統の『源氏小鏡』や『源氏詞知』に見えること（伊井春樹氏「源氏物語の別伝」『源氏物語の伝説』昭51・昭和出版）も、本物語と梗概書との親近性を物語っていよう。その他、『源氏』本文から飛躍した読解や、『源氏』にない記事をあたかも『源氏』にすでに書かれていたかのように見せる語り口など、梗概書のあり方に通じる点は多い。『源氏』そのものではなく『源氏』梗概書を補う存在として構想・創作された物語ととらえるべきであろう。なおこの観点から論じるべき点は多いと考えるが、後考を俟ちたい。

（8）この箇所に誤脱が想定され別本系の本文が本来と考えられることについては、前稿で論じている。

（9）今仮に「抄」と呼び、以下問題とする先行表現の摂取についても「抄」に指摘がある場合はその旨を注記する。

（10）なお当該場面の釈迦の呼称に、流布本系「仏」、別本系「釈尊」と異同がある。他の場面でもこの異同は一貫しており、どちらかの系統が書き改めたものと考えられる。改作者の宗教基盤などに関わるかとも思われるが、今それについて論じる術を持たない。今後の課題としたい。

――おがわ・ようこ、日本学術振興会特別研究員――